

# 沖

俳句雑誌[おき]

10月号

沖 発行所

# 蟬の乱舞

能村 研三

箱庭に居る人は皆前のめり

泳ぎきり人間くさくなくなりしかな

渾身の握手解かざる夏の果

終の日の蟬の乱舞は朴樹下に

八月の終りに、井上ひさしの芝居「芭蕉通夜舟」を見た。芭蕉の半生一人のシーンだけを切り取り、三十六歌仙にちなんだ全三十六景でまとめた芝居で坂東三津五郎がほぼ一人舞台の形で演じた。

三十六景の中には芭蕉の有名な句も散りばめられている。たとえば、

古池や蛙飛び込む水の音

何匹もの蛙が柳に飛び上がる風景で、三津五郎が柳を巧みに操る。それにたくさんの蛙が飛びつく。「ゲロ、ゲロ」と鳴く。ユーモラスに描いているのが井上ひさしらしい。

以前やはり井上ひさしの「小林一茶」の芝居を見たことがある。

これは、一茶が俳諧師・夏目成美によつて四百八十面を盗んだのではないかという疑いを掛けられたという事件を中心として構成されて、ミステリー仕立てにされているのが面白かった。

井上ひさしはこのように歴史上の人物を題材にするときには相当に下調べをするそうで、一茶の全集を何度も読み、さらには一茶の評伝を何十冊も集めて精査されたそうだ。

今回の芭蕉、以前に見た一茶にしろいずれも人間くさく描いているのが井上ひさし作品らしさである。

俳人としての人生をすこす傍ら、生活のために神田上水の水道工事の

軒端より蟬降り落ちる夕まぐれ

秋暑し渴きだましの飴一顆

秋灯に祈りと違ふ指を組む

中々にLED灯下親しめず

直情の息を堪へて秋暑かな

買ひ置ききの電池が合はず厄日前

事務の仕事に就いたり、生涯にわたる便秘のため長雪隠だつたりといったエピソードが織り込まれている。小道具の中でも一番活躍するのは芭蕉が句をひねり出す場でもある便座で、これが突然文机に変身したりして笑いを誘うが、作句時のタイミン

グは確かに便座と文机にはある意味共通したものがあるのかも知れない。

芭蕉の頃の俳壇は、滑稽や機知を競う句がもて囃されていたが、芭蕉が目指したのは、笑いや楽しさを求めるのではなく自然や人生の探究が刻み込まれた俳句だった。それが「わび」や「さび」あるいは「不易流行」の境地につながっていく。ここは何か現代の俳句の世界にも問題を投げかけているようにも思った。

芭蕉の人生は孤高と旅であったが、井上ひさしは「人はひとりで生き、ひとりで死んでゆくよりほかに道はないことを究めるために苦吟した詩人」と捉えている。

三津五郎が一人芝居の形であるが四人の舞台回しを兼ねた朗唱役の役も面白かった。

# 蒼茫集



蟬

大畑善昭

長鳴きの蟬読経と共に止む  
かたち無き蠟燭墓も灼けてをり  
施餓鬼会の五如来の偈に洗はるる  
浦島草実となる身丈きりりとし  
分封の蜜蜂玉にみるみるに  
稲の花夕日は明日へ還るため

葭障子

北川英子

とうすみのいのちの重さ草撓ふ  
月見草咲かんと濁流間近なり  
家中煌々梅雨の夜をひとり  
父母の夜の薄くらがりや葭障子  
烏瓜刺繍仕立てのくづれ咲き  
風を切る青水無月の退院車

減らず口

辻直美

祭浴衣やおとうとの減らず口  
いつも重たき四万六千日の空  
水溶性フェルトペンの梅雨に入る  
風鈴や夫なしの世を落着かず  
世の中と一線画す端居せる  
日傘さす母よ飛行船がゆくよ

落ちやまぬ

辻美奈子

母いつも聞き流す役小判草  
気の強き子の涼しさの泣き黒子  
うつし世の銀河のあはし昏睡す  
夜の秋いのちに淵といふがあり  
まなうらに滝落ちやまぬ眠りかな  
心臓の強きが家系茄子の花

標 的 千 出 百 里

なでしこが走るよ蹴るよ熱帯夜  
籠枕籠枕夫は 大志を忘れしよ  
比翼塚比翼塚の魂鎮めとも秋しぐれ  
八月や羅漢は何に拳上ぐ  
木の瘤に草を棲まはせ放生会  
先生がいつも標的ビール酌む

炎ゆる日 遠藤真砂明

揉みに揉む岬の神輿誕生日  
父よりも生きたし炎ゆる日を仰ぎ  
ハンモックより腕が出て脚が出て  
遠泳のどんじりといふ自在境  
紫蘇揉んで妻のいのちの真くれなゐ  
深海の真闇へ施餓鬼太鼓かな

衣 被 安 居 正 浩

今にして思ふやさしさ衣被  
ほほづきを灯せこの世の混沌に

すててこや明日巴里にも行けさうな  
雑踏の浮遊物めき夏瘦せて  
滝壺に水の息抜く瞬を見し  
ラベンダー旅の匂ひのまだ残る

日ざし充ち 田所節子

「付近です」カーナビ切れてより残暑  
線香花火びくびくの手を支へをり  
バケツの水鳴かせ手花火終はりけり  
山清水底まで日ざし充ちてをり  
内部より光ふくらみ滴れり  
夏怒濤むかしは恐き父のゐて

無 音 大川ゆかり

荒梅雨や多肉植物艶を増し  
深海の色の作務衣やあいの風  
追博多山笠二句ひ山笠の動く直前なる無音  
山笠昇きの荒縄にある陽の匂ひ  
子子や腹筋背筋鍛へをり  
わた菓子子の袋ふんはり月涼し

生 荒井千佐代

喪の百合や奏者席にて眼鏡拭き  
漸うとぬた場に梅雨の明けにけり  
蜘蛛の罫に一と日潮風潮鳴りも  
爆心地安かれと白夾竹桃  
買ひ立ての聖書をひらく泉かな  
黴の世の生ある限り生を詠む

未 踏 久染康子

青ぶだうすこし拗ねたる味したり  
青嶺また青嶺に噎び小梅線  
百名山制覇し雲の峰未踏  
青すすき強情な芯育ちけり  
初秋風行人坂に加速せり  
かなかな時雨羅漢に櫂の大廂

日の矢 望月晴美

この極暑突き刺すやうな日の矢かな  
遠山をからめ蜘蛛の罫出来あがる  
海へ行く子の大輪の夏帽子  
甘酸つばき葡萄離郷の日を思ふ

たましひのやうな自在さ螢の火  
江戸川へぞろぞろとくる団扇かな

考へる杖 千田 敬

明石蛸火攻め水攻めももいろに  
人生はプラス思考よ炎暑とて  
頼杖は考へる杖夜の秋  
病む地球知るや知らずや月涼し  
涸れてなほ滝の名のこす力かな  
行く夏や回転ドアに把手なく

父の日 宮内とし子

父の日や写真の裏の年月日  
顔だけは浮かぶかの人シャーベット  
夏霧の流るる速さ過ぎし日も  
箱庭の鶴を残して暮れにけり  
格言を読めば秋思の羅漢堂  
水かけ地藏水かけ損じ夏終る

花火師 鈴木良戈

花火師の黒子めきたる動きかな  
明日登る山へかかりし朝の虹  
朝顔の紺濃くのぼり暁けにけり

舟板で作る 棧橋雲の峯  
青東風や木造船の試乗式  
破船打つ夏逝く河の波の音

青田波 上谷昌憲

トンネルを出て満目の青田波  
向日葵のまあ高々と憔悴す  
眷属に知らぬ子が居る浮いてこい  
月涼し町のはづれのこんにやく屋  
蔑すだれ夕日斜めにひねりけり  
冷房や食欲旺盛シユレッダー

水中花 河口仁志

梅雨の真夜ナースコールを二度鳴らす  
梅雨深み名もなき滝の水嵩かな  
水中花睡りつづける母見舞ふ  
語り部の減りゆく世代終戦日  
籠蝻瞬のいのちの灯りかな  
永らへてあまたの謝恩雲の峰

供花 瀬上千津

天の川遺すに足るる一句欲し  
竜舌蘭いま命終の花掲ぐ

庭咲きの供花ほめ八月十五日  
御霊神まつり一山稲光り  
鰯群れて船に人なき船溜り  
油虫逃げよ隠れよ火点すぞ

二歳児 湯橋喜美

誕生日祝がれて薄暑生きむかな  
ダンボール折る炎帝にひれ伏して  
手花火の果てて過不足なき生活  
母との世つなぐ一衣よ風入れす  
桃食べて二歳児に殖ゆ好き嫌ひ

秋 螢 酒本八重

熟知せるこの樹が友や夏休  
熱い夏灼くる夏とて意思曲げず  
硯洗ふ大黒書道教師なり  
新涼や早口ことば練習中  
秋螢平家の名残尾を曳けり  
陶枕にひいやり夢の内攻す

# 潮鳴集

蟻地獄

齊藤 實

一八や昔神田に市場あり  
新生姜味噌に秘伝といふがあり  
蟻地獄待つと言ふのも不安あり  
胸見せて五百羅漢は夏惜しむ  
不動尊の火焰となりぬ日の盛り

余り風 栗原公子

工事に安全の文字三尺寝  
大屋根に太陽電池のせて夏  
炎帝に吾をさしだす歩道橋  
かぐはしきをとこ扇の余り風  
ひとりみに風ふき抜くる冷奴

肘しづく

甲州千草

発心に喝入れなほす朝曇  
考へる扇子ときをり止りをり  
蟬しぐれ行人坂を筒として  
風は秋水かけ不動の肘しづく  
石垣の苔さびさびと星流る

こだま仕込み 安藤しおん

もう少し寝かす詠草星涼し  
累代の土間青砥めく蟬しぐれ  
杣小屋にこだま仕込みの蝮酒  
遠の海引き寄せて帆の白日傘  
こゑ慎む羅漢の秋思堂に満ち



# 沖作品



## 能村研三選

パソコンに消えし原稿夏の果

遺言状書くべき齡敗戦日

落蟬や藁をも縋る術の無き

蟬の羽化千里の道を一步づつ

大暑かな机上に反古紙積み重ね

夏座敷今日には今日の風入れて

日盛りの朧といふ身の洞

男には男の矜持白地着る

竿灯の命の揺らぐ気魄かな

労働の大暑に耐へる喉仏

小気味よき啖呵ひとつも祭くる

のうぜんの高み競へり飾り山笠やまがさ

涼しさや愁眉描きて人形師

小刻みの団扇につもる無聊かな

似たる家の似たる窓の灯敗戦忌

静岡

東

良子

東京

関根

揺華

市川市

荒井千瑳子

古事記より古き話よ大賀蓮

言ふことを言はずに蚯蚓乾きをり

夕焼を使ひ切つてる部活かな

終戦の日は一歳で臍を出し

太平洋しかと祓いて海開

尺差しの氏名涼しき妣の筆

病み抜けて迷ふことなし沙羅の花

坩堝めく新大久保の熱帯夜

なんぢやもんぢやどんなもんぢやと咲き溢れ

白南風や新造船の艤装成り

梶の葉のほのと明るき茶席かな

新しき命の話蟬しぐれ

灯入り待つ郡上踊りの大提灯

徹夜をどり納めの歌は力増し

競ふことなじめぬ世代鯛雲

千葉

浅野

吉弘

千葉

座古

稔子

岐阜

金井

双峰

# 沖作品 15句選評

\*  
能村研 評

蟬の羽化千里の道を一歩づつ 東 良子

蟬は産卵後十中にいる期間は、一般的に七年ぐらいと言われている。地上に出てきてからは十日もしないうちに死んでしまうので、蟬は地上の生き物だと考えるより、地中の生き物と考える方が良いのかも知れない。地上に出て来るのは繁殖のため十日もあれば子孫を残すのに十分だそう。この句も地中の中で蟬の思いを寄せた句で、七年という長い歳月を千里の道を一歩一歩歩むように羽化に向けての動きが始まる。蟬の命の尊さに思いを寄せた作者の優しい心がうかがえる。

夏座敷今日には今日の風入れて 関根 揺華

襖や障子などを外して、風通しをよくし、夏向きの家具、調度を置いた座敷。現代の家では、冷房に頼ってしまって、窓を広く開放放つたりして、風の通りをよくした部屋の良さは余り感じられなくなってしまう。実際にはさして涼しくなくても、

外気との触れ合いによる開放感から涼味を覚えるものである。

そもそも、夏座敷の実質的な効果は、風の通りを良くすることにある。今日には今日の風を入れるという循環作用によって部屋の涼しさが保たれ、日本家屋のすばらしさが演出される。

小気味よき啖呵ひとつも祭くる 荒井千瑩子

東京下町での祭。胸のすくような小気味いい啖呵を切る声はどこからともなく聞こえてくる。「啖呵」と言えば、映画の「男はつらいよ」の寅さんが巧みな口上でものを売る。祭もいよいよ佳境に入ると高揚した場面からは、まさに江戸っ子の美意識である「粋」として啖呵が聞こえてくる。

夕焼を使ひ切つてる部活かな 浅野 吉弘

中七の「使ひ切つてる」の表現が面白い。野球部かサッカー部であろうか。県大会、さらには全国大会の出場を目指して日々の練習には余念がない。天気の良い夕方、グラウンドは真っ赤な夕日に包まれても練習が終わる気配はない。生徒たちにとって、日没のぎりぎりまでが練習時間なのである。生徒たちの一念の思いが伝わってくる。

なんぢやもんぢやどんなもんぢやと咲き溢れ 座古 稔子

なんじゃもんじゃは別名を「ひとつばたご」とも言って開花すると、豊富な花の量をつけ雪をかぶったような風景になる。花自身がその咲きようを「どんなもんぢや」と自慢しているかのようでもある。「もんぢや」のリフレインが句を面白くした。